

3 弥生の丘展示館でのアンギン編み体験と器材の作製

田中耕作・新井 順

はじめに

「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」は、新潟市秋葉区に所在する弥生時代後期～終末期の古津八幡山遺跡と、県内最大の円墳である古津八幡山古墳のガイダンス施設である。平成24（2012）年に開館し、この遺跡の発掘調査成果の常設展示と企画展示、及び体験学習やイベントによる教育・普及活動を行っている。

本稿では「カラムシのオヒキ」と「アンギン編み」のイベントについて、準備から当日の体験までを概観する。また、それらには専用の道具が必要となるが、安価に作製できる簡易な用具を考案したので紹介する。

本稿は田中と新井が協議の上、カラムシの生育とオヒキ体験及び用具の作製については田中が、アンギン編み体験は新井が主になって執筆した。「弥生の丘展示館」は「弥生館」と略称で用い、平仮名や難読漢字の用語は、文脈を考慮してカタカナで表記したものがある。

(1) カラムシとアンギン

カラムシはイラクサ科の宿根性多年草で、苧（カラムシ）・苧麻（カラムシ・チョマ）・青苧（アオソ）などと呼ばれ、日本では本州から沖縄にかけて分布する。高さ1～2m。弥生館のカラムシは、葉裏に白く細い綿毛が密生する白葉苧麻であり、葉形はシソのような広卵形で先端が尖る（写真2・6）。福島県南会津の昭和村のカラムシは、綿毛のないアオカラムシで、根株は村外持ち出し禁止とのこと。

図1にカラムシの茎の断面構造を示した。大きくは芯と外皮に分かれ、外皮は表皮と内側の韌皮（ジンピ）から成る。ジンピがカラムシの繊維であり、外皮から表皮を除去し繊維を取り出す作業を「オヒキ」という。

「アンギン」とは、妻有郷（ツマリゴウ）（十日町市・津南町あたり）での「編布」の読み方であり、この方言読みが民俗学や繊維工芸界では定着している。「越後アンギン」は、昭和29（1954）年に津南町で存在が確認され、縄文時代から続く編物の技法として、民俗調査が行われてきた〔阿部・竹内1994〕。考古学では「編布」をアミノ・アミギヌ・アンギンなどと読むが、本稿ではイベント名に合わせてアンギンを用いる。

アンギンは、2本の経糸（タテイト）で1本の緯糸（ヨコイト）をからめる（＝ねじる）「もじり編み」という技

法で作られ、スダレやムシロ状になる編み物である。写真16・図4のような編み台（十日町市は編機という）を使い、刻み目を入れたケタという目盛板と、タテ糸を巻いておくコモツチ（図5）という錘（オモリ）があれば編むことができる。

考古学では、土器底面の「スダレ状圧痕」が編物と認識されて、民俗事例と対比した研究が行われており、それらの用具と似た形や、同じ用法を想定できる出土品もある〔渡辺1976・1981、安孫子2009、松永2011〕。

これに対して「織布」は、弥生時代に朝鮮半島から伝来した綜統（ソウコウ）という織機（ショッキ）を用いる。タテ糸を交互に上下させて、間にヨコ糸を通す平織で、現在も衣料品の主流である。タテ・ヨコ各1本の糸で織る。

カラムシの繊維は、越後上布（ジョウフ）や小千谷縮（オヂヤチヂミ）の材料で、昭和村が主要な生産地となっている。麻布とは、苧麻（カラムシ）や大麻（タイマ）の織物のことで、上布とは細地で品質のよい上等の平織をいう。

(2) カラムシのオヒキとアンギン編みのイベント

弥生館では、平成25（2013）年5月に津南町からカラムシの根株を譲り受け、弥生館裏手の西向き緩斜面で育てている（写真1・2）。

平成29年度に、カラムシから繊維を取り出すオヒキとアンギン編みの体験イベントを、弥生館の事業として開催することになった。そして、昭和村織姫交流館へ講師の派遣を依頼し、同館から苧舟（オヒキパン）とオヒキ道具を各3組、乾燥カラムシを購入して準備を整えた。

平成29（2017）年7月8日にカラムシの刈取りと水浸けを行い、9日は昭和村の講師の指導でオヒキを行って繊維を取り出し、さらに購入したカラムシで糸を作る「糸撚り（イトヨリ）」を習った。2回目の9月3日は、参加者が1回目にオヒキしたカラムシを用いた糸撚り、翌年1月28日の3回目にはアンギン編み体験を行った。

平成30年度以降のイベント実施日は表1のとおりであり、7月のカラムシの刈取りとオヒキ、秋の糸撚り、コースターを作るアンギン編みを3回セットで申し込んでもらう。3回を続けて実施できればよいのだが、9月まで時間が空くのは夏休みで弥生館の体験学習が混むからである。

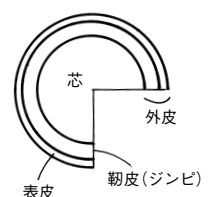


図1 カラムシの構造

表1 カラムシのオヒキとアンギン編み体験の実施日

	刈取り・オヒキ	糸撚り	編み	備考
平成25年度				5月に津南町からカラムシの根株を譲り受ける。
平成28年度				オヒキを弥生館職員で試行。
平成29年度	2017年7月8日(土)・9日(日)	2017年9月3日(日)	2018年1月28日(日)	昭和村から苧舟とオヒキ道具3組を購入、講師を招き一般体験実施。
平成30年度	2018年7月22日(日)	2018年9月2日(日)	2018年12月23日(日)	苧舟・オヒキ道具3組で体験を実施。
令和元年度	2019年7月17日(火)	2019年9月3日(火)	2019年11月19日(火)	卓上オヒキ台を6組作製し、計9組の道具で体験を実施。
令和2年度	2020年7月14日(火)	2020年9月1日(火)	2020年10月13日(火)	卓上オヒキ台を10組に増やし、体験実施。苧舟は不使用。
令和3年度	2021年7月14日(水)	2021年9月1日(水)	2021年9月29日(水)	卓上オヒキ台10組で体験を実施。以降、同じ。
令和4年度	2022年7月14日(木)	2022年9月1日(木)	2022年9月29日(木)	
令和5年度	2023年7月5日(水)	2023年9月13日(水)	2023年9月27日(水)	

2回目の糸撚りは、コースターのタテ糸に使う太さ約1mmの縄作りを行う。3回目は10cm幅のコースター(写真18)を編むが、これは両端を編み込む難易度の高い工程を含むため、成人向けの平日開催としている。

なお令和5年度には、小学生向けの簡単なアンギン編みイベントとして、土曜日開催で「ムシロ編み」を実施した(写真19)。タテ糸にタコ糸を使い、ヨコ糸のカラムシは両端を切りそろえた。カラムシは、そのままと藍染め、桜の実で染めた濃いピンク色、という3色を組み合わせ、好評だった(写真20)。

(3) カラムシの生育観察

平成25(2013)年に植えたカラムシは、令和5(2023)年で最大幅6m、斜面長8m、40㎡ほどの範囲に広がっている。4月後半から芽吹きが見られるが、自然まかせではほとんど手をかけていない。生長写真は、断りがなければ令和5年度の記録である。昭和村では、芽吹きの頃の5月に発芽を揃えて生長が均一になるよう、また病害虫の発生を抑える目的で、畑に火入れを行うという。当館は、山林に接しているため火は使えない。

5月13日、風によるカラムシの倒れを防ぐ目的で、1mピンポールと竹を用いて、高さ70～80cmの柵をめぐらした(写真1)。また管理や刈取りを容易にするため、畑の中に60cm幅の通路をT字形に設けた。カラムシの高さは30～80cmあり、柵を作るのが少し遅かった。

5月24日、高いカラムシは130cmあり、雨降りを含む4日間で20cmも伸びている。6月16日には160cmほどが多くなり、7月2日では180cmになった。密生して育ちは良かったが、カラ梅雨の影響が全体的に細い。

令和3(2021)年5月は、アカタテハの幼虫が大発生した(写真3・4)。白い葉裏を外にして丸め、中に入っている葉を食するため餃子が並んでいるような景観だった。農薬を脚立の上からジョウロで散布し、駆除した。2022年も同様に駆除したが、2023年は発生しなかった。

7月5日はイベント第1回目で、カラムシの刈取りと

オヒキを実施した。最も育ちの良い区画は北東隅で、最高は200cmまで育った。密生していたので、茎も緑で柔らかい。畑の南側・西側の外縁のカラムシは、強い日差しに常時当たるためか、茎が木質化して硬く茶色になっており、皮剥ぎで折り曲げると皮が切れやすい。

7月17日までに職員が断続的にオヒキをし、良好な状態のカラムシは全て刈り終えた。細く、あるいは短いカラムシが散在しているが、刈って除去する。新たに芽生えたカラムシ(2期作目)は、60cmほどに育っている。

8月15日、2期作目は生育にかなりのバラツキがある。南西隅の一角は120cmに伸び、オヒキを行った。水浸けには魚のブリを運搬する発泡スチロール(内の長さ90cm)を使ったため、長い繊維はとれない。芯は夏前の1期目よりも硬く感じたが、ジンピの繊維は変わらない。1期目を刈取ってからの生育は早く、青々とした葉は上から1/3に集中し、下部は少ない。葉の付け根から脇芽が生えていて、1期目には見られなかった現象である。雨が1か月以上降らないためか生長は鈍く、120cmほどで止まったようだ。また生長にムラがあって、全体で風を支え合う状態ではない。低いものは40～50cmで密生している。120cmくらいに生長したものをオヒキする。

9月17日、花が茎の上部に鈴なりに付いている(写真6)が、最後のオヒキを行った。太い茎は少ないが、長い繊維を求めなければ、11月初旬くらいまでオヒキが可能である。この花は、雄花序(オカジョ)で、花粉が茎の先端にある雌花序(メカジョ)に受粉すると種ができ、飛んで着地すると発芽する。

(4) カラムシの刈取り

オヒキ体験の前日の準備として水槽を2個用意し、1個にはイベント参加者がオヒキするためのカラムシを夕方刈って浸けておく。もうひとつは、当日刈ったカラムシを浸けるためのもの。基本的に、一晩浸けたカラムシは午前中にオヒキし、朝に刈って水浸けしたものは午後オヒキしている。水槽は建設現場で使う樹脂製で、上

端内寸143×82cm、下端内寸は133×73cm、深さ20cmである。カラムシは水槽の長辺に合わせて約130cmで切る。

第1回目イベント当日の7月5日は、カラムシの刈取りとオヒキを実施し、花バサミを用意して参加者に刈取りを体験してもらった(写真5)。職員の刈取りは剪定バサミが楽である。太くて背の高いカラムシを優先して刈り、葉を落としてから、130cmの細い竹を定規として先端をカットし、水槽の水に浸ける。なお、先端の小さな葉は食用になる。

(5) カラムシのオヒキ

オヒキの前段階として、外皮と芯を分ける作業がある。水浸けカラムシの根元側から1/3ほどの位置で、皮が切れないようにゆっくりと折ってから水平に持ち、左右の手を上下に一気にずらすと外皮が芯から剥がれ、平行四辺形のようなになる(写真8)。外皮と芯との間に指をいれてスライドさせ、先端側の上下の外皮を剥ぐ。根元側も二握り(15cm)ほど残して外皮を剥ぎ、芯もそこで折る(写真9)。写真7の水槽は、奥が刈取り後の水浸



写真1 風倒れ防止の柵



写真2 カラムシ畑の案内



写真3 アカタテハの幼虫



写真4 アカタテハの成虫



写真5 刈取りの様子



写真6 カラムシの花(雄花序)

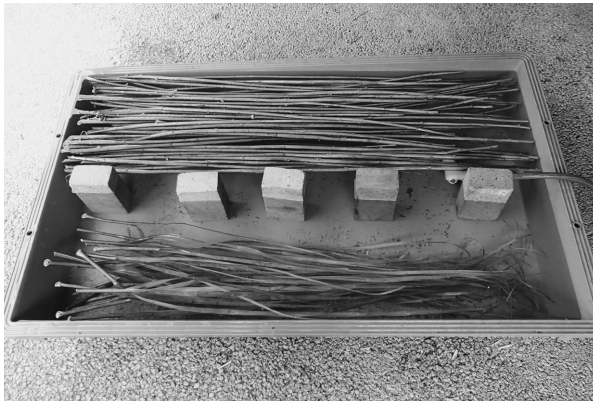


写真7 水浸け



写真8 皮剥ぎ



写真9 外皮と芯



写真10 舟舟でのオヒキ



写真11 オヒキ（右利き）



写真12 オヒキ（左利き）



写真13 オヒキ板



写真14 オヒキ金

け、手前が芯を取った状態であり、オヒキで持ち出す際には残った芯をここで外す。このように芯を少し残すと、水中で外皮が絡まることを防げる。外皮は2枚に剥いてからオヒキで表皮を除去するが、直径0.8cmの茎から表皮を2枚にはいだ幅は1.34cm、同じく直径1.2cmでは2.0cm幅であり、この範囲くらいがオヒキをやり易い。

オヒキの道具と用語

オヒキ金で外皮から表皮をそぎ落として、ジンピの繊維を取り出す作業がオヒキである。弥生館では、昭和村から3組の苧舟とオヒキ用具一式を購入し、交代での使用を前提に10名の参加者募集を行っていた。苧舟は1台が数万円と高価なことと、板の床に正座しての作業であり(写真10)、準備・片付け作業も大変なために、簡易で廉価に作れるオヒキ台とオヒキ板・オヒキ金を考案した(写真11~14)。これらを10組用意したことで、参加者全員が同時にオヒキを体験できるようになった。

用語や器具の名称は昭和村に倣ったが、「苧績み(オウミ)」は難しいので「糸づくり・糸撚り(イトヨリ)」に変えている。昭和村の「苧引き(オヒキ)」が十日町市・津南町では「苧掻き(オカキ)」という。写真14の「オヒキ金(カネ)」は昭和村「苧引き金・苧ひきご」、十日町市「オヒキガネ」である。昭和村の「苧舟」は、当館・十日町市の「オヒキ台」が相当しよう。なお、「もじり編み」の「もじる」は会津方言で「曲げる」という意味とのこと。

オヒキ作業の手順

図2及び写真11・12をご覧いただきたい。コンテナを積んで高さを調整し、最上段には「コンテナ18」(内寸50×34×深さ10cm)を置き、水を3cmほど入れる。オヒキ台をコンテナの縁に載せ、その上にオヒキ板を置く。コンテナの横にはゴミとなった表皮を入れる小コンテナと水を入れたボウルを、反対側にはオヒキした繊維を並べる新聞紙を敷いて準備完了となる。

カラムシ2~3本分の外皮を持ってきて、コンテナの水に入れる。右利きなら、カラムシの根元側を左手で持って、オヒキ板の上に置き、オヒキ金(写真14)で左から右へと表皮をこそげ取る。カラムシを左へ引きながらこれを繰り返すが、水気が少ないと繊維が切れやすいので状況に応じ水をかける。貝殻をこの水汲みに用意したが、石垣島・宮古島ではトコブシの貝殻でオヒキをしたという。オヒキ板は、適度に跳ね返るため作業がやり易く、オヒキ台を痛めることもない。オヒキした繊維は、ボウルの水ですすいでから新聞紙に置く。

簡易なオヒキの道具の作製

弥生館で考案したオヒキの道具は3種類(図2・3、写

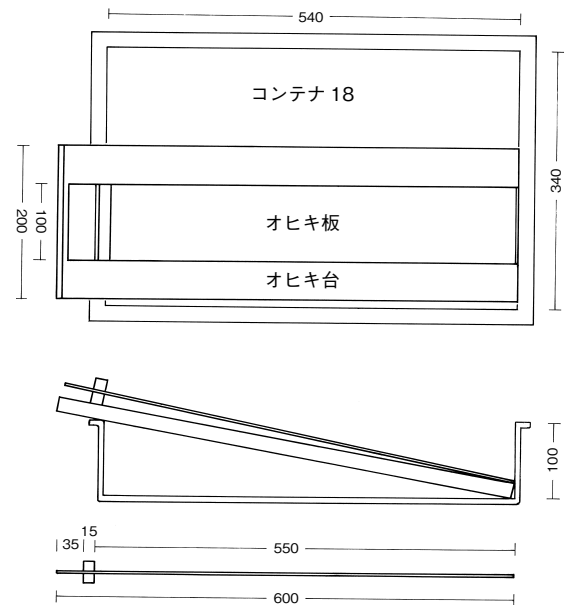


図2 オヒキ台とオヒキ板

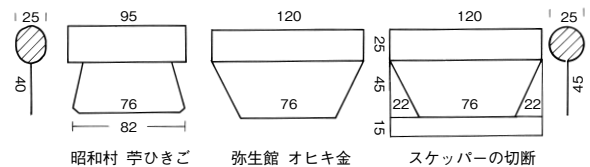


図3 オヒキ金の作製

真13・14)で、いずれもホームセンターなどで材料を購入できる。オヒキ台は、1818×200×厚さ18mmの集成材を3等分したもの。オヒキ板は600×100×厚さ3mmの薄板に、15mmの角材を100mmに切って両側から挟むように釘で打ち付けたものである(写真13)。オヒキ金の原形は製菓用スケッパーで、ステンレスを切る加工のために最も手がかかる。写真14の右側が昭和村の「苧ひきご」で、左が弥生館のオヒキ金である。刃の幅は76mmに揃えた。スケッパーは万力(マンリキ)で固定するのが難しいが、図3右端の線に沿って金切鋸刃で切断し、金属用の平ヤスリでバリを取る。最後に砥石で刃(両刃)を付けて完成である。なお、昭和村のオヒキ金の持ち手は木製だが、スケッパーはステンレスを丸めただけなので、力を入ると歪んで安定しない。古いモップの木の柄を切って差し込んだら、使い勝手が良くなった。

(6) 糸づくり

第2回目は、最終目的であるコースター(写真18)のタテ糸を作る。タテ糸は2本の繊維を撚った太さ1mmの細い縄で、長さ60cmを6本必要とする。3m60cmを作り6本に切るか、60cmを超えたところで結び目を二つ作って間を切り、これを繰り返す。縄の太さを一定にしつつ、繊維を足して長くつないでいくのが初心者には難し

表2 考古学と繊維工芸・民俗学での縄紐の呼称

考古学用語〔佐原1981〕		繊維工芸用語〔尾関1996〕		越後アンギン〔阿部・竹内 編1994〕		撚り方向
撚り紐	右撚り 0段 ℓ	紐	右の片撚糸 (s 撚り)	撚り亭	右撚り 右手を手前に引く	s 撚り
	左撚り 0段 r		左の片撚糸 (z 撚り)		左撚り 右手を先方へ押す	z 撚り
縄	右撚り 1段 $R \begin{Bmatrix} \ell \\ \ell \end{Bmatrix}$	縄	左の諸撚糸 右の片撚糸2本を合わせ、左に撚る	左縄	右撚りヨリソ2本を合わせ右手を手前に引く	z 撚り
	左撚り 1段 $L \begin{Bmatrix} r \\ r \end{Bmatrix}$		右の諸撚糸 左の片撚糸2本を合わせ、右に撚る	右縄	左撚りヨリソ2本を合わせ右手を先方へ押す	s 撚り

(考古学での表記)

0段 撚り紐		
1段 縄		

い。アンギン研究の第一人者であった滝沢秀一氏も、「編み方を教えてくれ、という人は多いが、大ていこれで止めてしまう。」と述べている〔阿部・竹内編 1994〕。

弥生館では、長さ20cmの細く裂いた紙紐でコヨリを作り、それを二つに折って縄を撚る練習から始める。昭和村では左撚りと決まっているが、コヨリの右撚り・左撚りは各自に任せている。3 m60cmの縄作りは時間がかかるので、見本を渡して次回までの宿題となる。ケタの刻み目に入る太さの0.9~1.2mmくらいを目指す。ただ、この縄作りは強要するものではなく、コースター編みの当日はタコ糸を代用として用意することも伝えている。

縄文時代の編物と縄紐の講義

この回は、縄文遺跡のスタレ状や網代（アジロ）などの編物とその圧痕、弥生時代の布圧痕土器底面といった出土資料を用いて「編物と縄の基礎知識」の講義も行った。考古学と繊維工芸・民俗学では縄紐に対する「右撚り・左撚り」の呼称が逆だと知っていたが、比較資料として作成したのが表2である。十日町市・津南町あたりでは、繊維に撚りをかけた「紐（ヒモ）」を「撚り亭」（ヨリソ）と言ひ、2本の紐を撚り合わせると「縄」になる。繊維工芸では、この前者を「片撚り糸」、後者を「諸撚り糸」（モロヨリイト）という〔尾関1996〕。

縄文土器の「縄文」が、縄の回転圧痕によるものと発見したのは、昭和6年、山内清男氏である。氏は、繊維束を縦に置き、繊維が右上から左下に傾斜したもの（左さがり）を「右撚りr」、逆を「左撚り ℓ 」とした。これを「0段の条」という。r2本を撚り合わせると「節」という長粒が右下がりの「左撚りL」ができる（表2右図）。 ℓ 2本を撚り合わせると「右撚りR」となる。r・ ℓ は「片撚」（繊維に撚りを加えたもの）である。RとLは一段目の撚り合わせのため「一段の縄」と呼び、一段の縄を2本撚り合わせると「二段の縄」となる。考古学では、この山内氏が提唱した符号で各種の縄を表記する〔佐原1956・1981、戸田1983、山内1964・1979〕。

なお山内氏は、日本と西洋では右撚り・左撚りの表記

が逆であるが、螺旋・渦などの傾きが共通する西洋の表記に「縄文」を合わせることにしたという〔山内1967〕。日本古来の撚り方向の呼称は、繊維工芸や民俗学で使っている右撚り・左撚りであり、縄文だけが異なる。

(7) コースターの編み方（編み始めまで）

第3回はアンギン編みである。タテ糸は直径1mmほどの6本の縄で、ヨコ糸は裂いたカラムシの繊維を使い、10×10cmのコースターを作製する。縄文時代に多い1本のヨコ糸に2本のタテ糸を毎回からませる「基本編物」ではなく、2本のヨコ糸に1目おきに2本のタテ糸をからませる「応用編物」〔尾関1996〕を体験する。

まず、コモヅチ（図5）にタテ糸を巻きつけるが、糸をコモヅチの上端の穴から通してドラフティングテープで上部に留め、下へ引っ張った糸を上から4~5回巻きつけてから、上へ引くと緩まない。これを糸の両端とも行ひ、コモヅチ12本を使って6組を作る。1本飛ばして編む時の目印に、3組のコモヅチには赤い印を付けておく。編み進めてタテ糸が短くなると、コモヅチの下の方から巻いた糸はずし、糸を伸ばして使う。

編み台（図4、写真16）のケタ上面には、1cm間隔で刻みを入れてあるが、タテ糸の間隔を2cmとするため、1本おきに6本のタテ糸をかける。赤印のコモヅチは、無印と交互となるように。コースターの左右両端をハの字状に編む難しい処置をするため、長岡市馬高縄文館が作成した「越後アンギン・編み始め」という資料を譲り受けてテキストにしている。また写真17のように、編み台の大きな模型を作り、タテ糸は赤と黒色の綿ロープ、ヨコ糸には太さ1cmの太く白い綿ロープを用ひ、逐次編み方の説明を行った。左右両端の折り返しは覚えるまでが大変だが、慣れれば同じ繰り返しである。

次に、ヨコ糸の中ほどをケタ前面の上端中央に当て、両側をケタ端の刻みに引掛ける。左から右へと編み進めるため、始めに左から1・3・5本目のタテ糸を編む。まず1本目の手前側（表側）のコモヅチを裏側へ、裏側の

コモヅチは手前に持ってきて、両方のタテ糸を前後に軽く引っ張りヨコ糸を締める。3・5本目も同様に編む。2本目のヨコ糸を横1段目の上にセットし、2・4本目のタテ糸を同様にからめる。この時は、1段目と2段目のヨコ糸をいっしょにからめることになる。さらに3本目のヨコ糸を右寄りに添えて、6本目のタテ糸を1～3段の3本のヨコ糸にからめ、編み始めの準備とする。その後、左右両端をハの字状に編み込み、ヨコ糸として折り返し順次タテ糸をからめていく。



写真15 編み体験の様子

アングンの編み台とコモヅチの作り方

弥生館では2種類の編み台を自作してイベント体験に使用しているが、作製が容易な図4（写真16）の作り方を紹介する。ケタは450×45×厚さ9mmの板で、アミアシは1200×45×厚さ12mmの板を4本に切る。ケタにはタテ糸をかける上幅2mm弱のV字状の溝をノコギリで切るが、10mmおきに引いた鉛筆線の片側だけを切ると良い。ケタに幅24～25mm、深さ20mmの切り込みを作り、前後にずらした2本のアミアシには幅9mm、深さ20mmの切り込

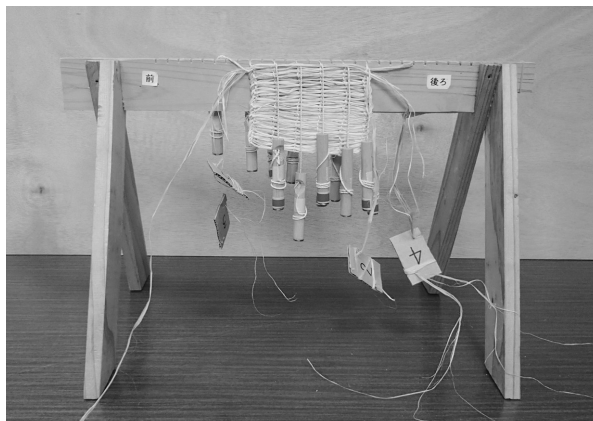


写真16 編み台

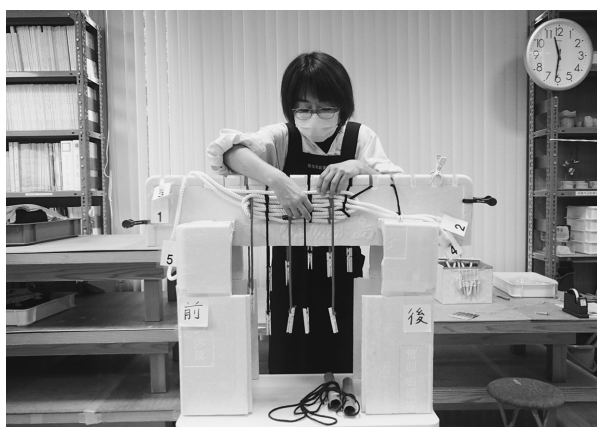


写真17 編み台の模型



写真18 作品（コースター）



写真19 やさしい編み方

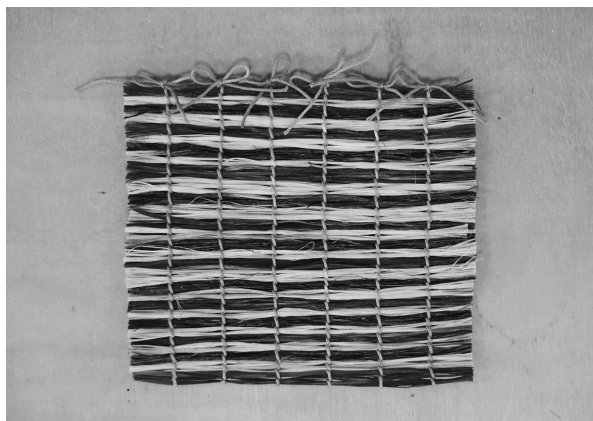


写真20 縁の裁ち落とし

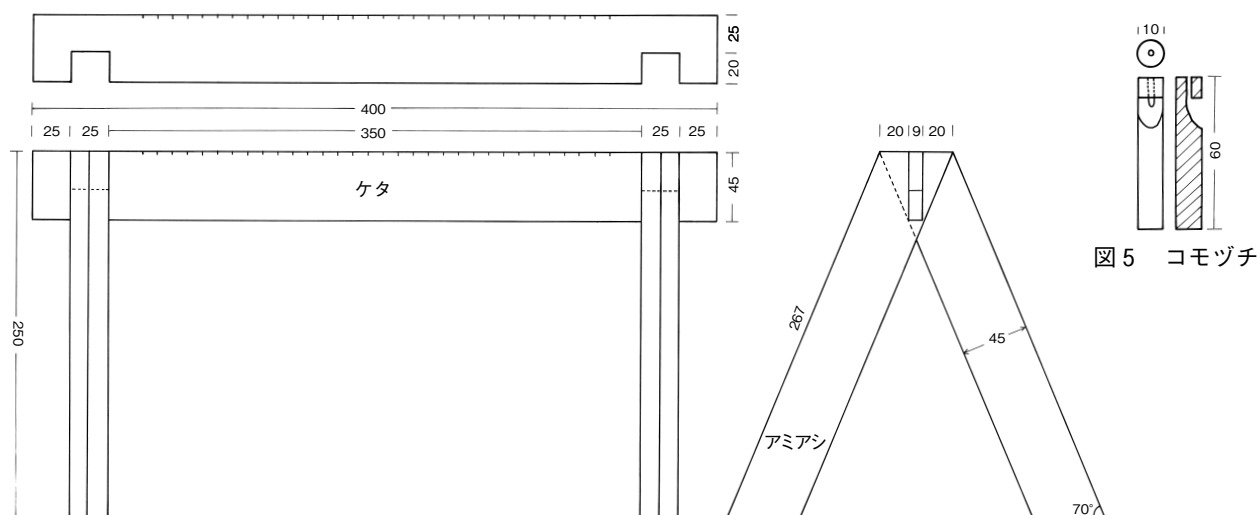


図4 アンギンの編み台

図5 コモヅチ

みを入れ、それらを組んで木工用ボンドで接着する。アミアシが4本とも接地するよう、固化する間に微調整するのがコツである。

コモヅチ(図5)は、直径10mmの丸棒を長さ60mmに切り、図のようにノコギリと切り出しナイフで窓を削り取り、万力(マンリキ)で挟んで直径3mmのドリルか「三つ目キリ」で穴を貫通させる。このままでは軽いので、底に六角ナットを接着する。なお、同様の形を焼き締め粘土で作ったら適度に重く、使いやすかった。この場合、側面に縄文を施すと巻き付けた糸が滑らなくて良い。

おわりに

筆者らは、「カラムシ」や「アンギン編み」という用語は知っていたものの、生育するカラムシを目にしたのは弥生館の畑が初めてだった。イベントを通して、敷居が高いと思っていたカラムシのオヒキやアンギン編みが、あまりにも簡単に体験できることに驚き、考古学研究者のみならず、多くの人に知っていただきたいと、寄稿を思い立ったものである。

弥生館の休館日を利用し、館員全員で2019年9月に南会津の昭和村「からむし工芸博物館」へ、2020年9月には十日町市博物館と津南町「農と縄文の学習館なじょもん」へと、カラムシ・アンギンを求めて自主研修に行った。もちろん、目的のひとつは蕎麦だった。

<参考・引用文献>

- 安孫子昭二 2009「切目石錘による「もじり編み」実験」『東京考古』27 14～32頁 東京考古談話会
- 阿部恭平・竹内俊道(編) 1994『図説 越後アンギン』十日町市博物館
- 尾関清子 1996『縄文の衣』学生社

- 佐藤雅一・佐藤信之ほか(編) 2011a『植物繊維を「編む」—アンギンの里 津南の編み技術と歴史—』津南学叢書第14輯 津南町教育委員会
- 佐藤雅一・佐藤信之ほか(編) 2011b『植物繊維を「編む」—アンギンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯 津南町教育委員会
- 佐原 真 1956「土器面における横位文様の施文方向」『石器時代』第3号 25～36頁 石器時代文化研究会
- 佐原 真 1981「特論—縄文施文法入門」『縄文土器大成』3—後期 162～167頁 講談社
- 戸田哲也 1983「縄文」『縄文文化の研究』第5巻縄文土器Ⅲ 170～190頁 雄山閣出版
- 名久井文明 2023『民俗考古学—必要が生んだ継続性—』物質文化研究所 一芦舎
- 松永篤知 2011「日本列島先史時代の編物—縄文時代の編布を出発点として—」『植物繊維を「編む」—アンギンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯 13～27頁 津南町教育委員会
- 宮原俊一 2007『編みと織りの考古学』東海大学校地内遺跡調査団・東海大学文学部文化活動委員会
- 山内清男 1964「縄文式土器・総論 Ⅲ 縄文」『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社
- 山内清男 1967「第二十七 縄文土器の技法 註1」『山内清男 先史考古学論文集』第五冊 232頁 先史考古学会
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 渡辺 誠 1976「スグレ状圧痕の研究」『物質文化』26 1～23頁 物質文化研究会
- 渡辺 誠 1981「編み物用錘具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集』LXXX 史学27 1～46頁 名古屋大学文学部